

龍門北朝隋唐造像銘に見る 浄土信仰の變容

倉本 尚徳*

(日本 龍谷大學・東洋大學)

はじめに

造像銘の願文においては、亡者あるいは現存者が死後に天に生まれかわったり、浄土に往生したりすることを願い、その生まれかわった先において、佛に会い法を聞き、最後には、成佛すること、あるいは、正覺を成ずることを願うというものが多い。この、いわゆる生天・浄土信仰は願目の中心的存在となっている。本稿は、既発表の拙稿をふまえつつ⁽¹⁾、北朝から唐にかけて、天や浄土に生まれかわることを願う信仰がいかなる變容をとげたかを龍門石窟造像銘を主な資料として明らかにすることを目的とする。龍門石窟は北魏有紀年造像銘 200 件弱、唐代紀年造像銘約 500 件という、同一地點に存在するものとして、他に類例がない数の紀年造像銘を有する。それらを分析することで、生天・浄土信仰の時代的變容を明らかにすることができると思われる。

北朝時代の造像銘を利用した西方浄土信仰に關するこれまでの研究によって、西方浄土信仰を願う場合は必ず無量壽像や阿彌陀像を造る、というわけではなく、釋迦や彌勒など様々な尊像の銘に西方浄土信仰が表されていることが明らかにされている。また、北魏時代の造像銘に表現された西方浄土信仰について、おおむね中國固有の神仙・昇仙思想などに基づく天上世界への憧憬と混合した、漠然としたものであると論じられてきた⁽²⁾。

そして、龍門石窟造像銘において、像の尊名が北魏時代の「無量壽」から唐代の「阿彌陀」に變化するという塚本善隆氏の極めて重要な指摘の後

*龍谷大學アジア佛教文化研究センター博士研究員、東洋大學東洋學研究所客員研究員。

も⁽³⁾、ながらく、造像銘文に使用される語句の變遷を詳細に分析し、淨土に關する用語が北朝から隋唐時代にかけていかに變容したかを明らかにするという作業がなされてこなかった。

その中で、佐藤智水氏は、北朝時代の龍門石窟造像銘以外に單立像の銘文をも廣範に収集し、天や淨土に關する用語を分類し簡潔に表に整理したが、その用語に時期的・地域的偏りは見られないという結論に達している⁽⁴⁾。

一方、久野美樹氏も造像銘を博搜したが、そこで使用される天や淨土關連の語句に年代的變化があることを見出し、それを像の造形とも関連づけて分析した⁽⁵⁾。具體的には、北朝期の造像銘において、生天・淨土願望を表す用語として、北魏の龍門石窟を中心に「託生西方妙樂(洛)國土」という定型句が多用されていることを明らかにし、南北朝期の託生西方願望が、昇仙思想以外に、『法華經』の思想にも基づくものであることを指摘した。さらに、隋唐代につながる淨土教の新しい變化を表すものとして、曲陽縣出土の北齊天保六年(555)無量壽像記⁽⁶⁾が「往生西方極樂世界」という語を有すること、同じく曲陽出土の天統六年(568)の劉遵伯造像記⁽⁷⁾に「彌陀玉像觀音大勢二菩薩」という、いわゆる西方三聖の尊名が見えることを提示した。北齊時代の具體的な造像銘に、「極樂」などの以前とは異なる語句が用いられたことを發見し、『觀無量壽經』(以下『觀經』と略)を中心とした隋唐代につながる新しい西方淨土信仰の出現をそこに見出した氏の指摘は傾聴すべきである。ただし、それらの變化が「汾州付近に巻き起こっていた曇鸞を開祖とする(中略)中國淨土教の波が曲陽縣にまで至」ったものであると推測することには議論の餘地があると思われる。

さらに、近年の成果として、石川琢道氏や齊藤隆信氏の論考が挙げられる⁽⁸⁾。石川氏は北魏時代の造像銘に表された無量壽佛信仰に關して、曇鸞の思想との關係を考察し、齊藤氏は、僧傳類と金石資料を検討し、淨土教の時代區分として、『觀經』による實踐體系の整理された六世紀中葉が晝期であるとし、それ以前を中國初期淨土教と命名する。筆者も齊藤氏の時代區分には贊意を表しておきたい。ただ、兩氏ともに造像銘資料を提示し貴重な成果ではあるものの、銘文の語句の詳細な分析は行われていない。

中國における研究では、北朝有紀年造像銘を網羅的に取り扱った成果として、侯旭東氏の研究が重要であり、侯氏は、529年以前は天に生まれたとする信仰が比較的流行し、529年以降は西方浄土の信徒が優勢になるが、死後の歸趨先としての西方浄土を受容したのみで、無量壽や阿彌陀について知る者は稀であり、浄土教義に関する他の内容は受容されなかったと結論づける⁽⁹⁾。劉長東氏は、浄土信仰が表された北朝造像銘資料を多数紹介し、北朝時代の民衆の阿彌陀信仰に彌勒信仰が混在している状況を指摘し、北方において浄土信仰が発展した原因としては、曇鸞、地論師たちの宣揚、南朝からの影響以外に、北朝の不安定な社会状況があるとする⁽¹⁰⁾。

筆者は前稿において、北朝から隋代にかけての有紀年無量壽・阿彌陀造像銘を収集して分析を加え、北齊後半期の無量壽・阿彌陀造像銘に、それまで見られなかった『觀經』に典拠を有する語が新たに見られるようになることを指摘した。具體的には、この經の「眉間白毫右旋宛轉、如五須彌山。佛眼清淨如四大海水、清白分明」[T12:343b]という、無量壽佛の佛身を觀想する箇所を典拠とする語句を有する造像記がほぼ同時期に3件見られることを新たに指摘した。そして、このうち1件は、北齊王朝において文宣帝の師であった僧稠の弟子智舜が主導した集團による阿彌陀造像記であり、すでに指摘されるとおり僧稠は小南海石窟内に九品浄土を表現した浮彫を禪觀のために彫刻している。これらの事實から、僧稠-智舜といった、太行山脈一帯において、禪觀などの實踐を重視した僧たちの活動が、北齊期における「無量壽」から「阿彌陀」へという尊像名の變化の一因であると論じた⁽¹¹⁾。

前稿で表に示したように、隋代には「阿彌陀」という尊名を記す造像銘の数が増加し、地域的分布もより廣がりみせるようになった。それでは、唐代では浄土信仰にどのような變化があったかを、まず、龍門石窟を足がかりとして調査せんとするのが本稿の目的である。

北朝から唐代にかけての生天・浄土信仰の變容を理解するのにふさわしい資料が龍門石窟造像銘である。龍門石窟については、夙に塚本善隆氏が、北魏造像銘では釋迦・彌勒中心であるのに対し、唐代は阿彌陀の銘記を有する像が壓倒的に多くなったことを明らかにし、「龍門の石窟に於ける造像對象の變化は、北魏中原のかくの如き漠然たる浄土信仰が、齊隋から唐の盛期に至る間に、阿彌陀佛の西方浄土を專念要求する浄土教によつ

て、教化せられてしまったことを、明かに物語つてゐるのである」と述べた⁽¹²⁾。この説に對し礪波護氏は疑問を呈し、盧舍那像銘にも西方淨土信仰が見られることから、造像銘を資料にする限り、北魏時代に釋迦や彌勒を造って西方淨土への往生を願った人達と同様な信仰の實情であったとする⁽¹³⁾。また、曾布川寛氏は、唐代龍門に阿彌陀像が多いといつてもそれは龕像がほとんどで、主要窟にはやはり釋迦像が多く、あくまで釋迦信仰が中心であると論じた⁽¹⁴⁾。近年、唐代龍門石窟に関する大著を公にした久野美樹氏も曾布川氏の立場に近く、唐代龍門石窟の淨土觀は、西方淨土一邊倒ではなく、「諸佛の淨土」であり、「西方淨土」もそのうちの一つであるとするものであり、塚本善隆氏の説に見直しをせまるものであった⁽¹⁵⁾。

龍門石窟と淨土信仰の關係を扱った中國の研究者の主な論考としては、李淞氏や賈發義氏の論考があるが⁽¹⁶⁾、とりわけ重要であるのは、李延恩氏の研究である⁽¹⁷⁾。氏は、唐代龍門阿彌陀造像を、第一（約 640-660）・二期（約 660-683）、第三（約 684-704）、四期（約 704-745）と時代区分した。そして、第一・二期の「造佛像」から、第三・四期の「浮彫淨土變」へと大きな變化が見られるとし、この原因として、善導が「觀淨土」の重要性を強調したことを指摘する。李氏の指摘は非常に重要であるが、その時代区分の妥當性についてはさらに檢證が必要であろう。

以上の問題關心に基づき、本稿では、第一節において、生天・淨土信仰を含む南北朝から隋代までの有紀年造像銘について、各用語を地域・時代別に分類・整理し、それぞれの具體的用語について地域的偏在性や時代的な盛衰を明らかにし、生天・淨土信仰の全體的な動向を把握する。第二節では、北魏時代と唐代の龍門石窟有紀年造像銘における天や淨土信仰を示す造像銘を表に整理して比較し、その變化の狀況を通觀する。第三節では、これまで明らかでなかった、龍門石窟造像における善導淨土教信奉者の關與を直接的に示す新資料を提示し、その資料を出發點とし、善導淨土教が唐代龍門石窟における淨土系の造像に及ぼした影響についての從來の諸説を改めて考え直してみたい。

一 造像銘中の生天・浄土信仰を表す用語の地域・時代的分布状況

既に述べたように、北朝造像銘からうかがうことのできる當時の人々の意識では、天と浄土をさほど区別していなかったということがほぼ定説となっている。ただし、造像銘に見える生天・浄土関係の個々の語句についての地域的分布、時代的變遷については、いまだ十分に明らかにされていないと思われる。そこで、本節ではまず、この問題について検討し、北朝から隋にかけての造像銘に表された生天・浄土信仰の總體的な動向を把握することを目的とする。

最初に、筆者が獨自に収集した北魏～隋代、さらに南朝の有紀年造像銘に見える天と浄土関連の用語の用例を分類整理し、各用語の件数を地域別、王朝別に整理したのが表1であり、用語ごとに件数の多い順に示し、各項目について、生天・浄土、彌勒下生信仰を有する造像記の總數に對する割合の時代的變化を示したのが表2である。具體的にいかなる造像銘資料を用いたかについては、筆者の博士論文末尾附録をご参照いただきたい⁽¹⁸⁾。表によれば、時代的・地域的な偏在性がある語も散見される。中には、定型句的に頻繁に用いられる語句がいくつかあり、四字でひとまとまりになっているものが多い。そこで、以下代表的な語句についてとりあげ、表を参照しつつ、簡単に説明していきたい。

a. 天に生まれかわることを表す語

天や浄土に生まれかわる語句として最も多く現れるのは、「亡者生天」であり、初出は、北魏太和元年(477)安憲縣堤陽□□(堤場陽)造像記⁽¹⁹⁾である。安憲縣は現在の河北省定州市南東に位置する。筆者の調査した北朝～隋代の有紀年銘全體では、この語句の見える造像銘は59例あり、地域的には、陝西でほとんど見られない以外は廣範囲に見られる。とりわけ北齊時代の河北地域で非常に多く見られ、「亡者生天、見存得福」、「亡者生天、見存安穩」のように、死者と現存者を對句的に表現した定型句として頻繁に用いられている。總數としては、北齊時代までは増加傾向にあるが、隋代になるとやや減少する。

天に關して「亡者生天」に次いで多いのは、「上生天上」という語句で、

筆者は 19 例見出した。初出は、北魏皇興五年（471）新城縣民仇寄奴造像記⁽²⁰⁾であり、新城縣も現在の河北省に位置する。表を参照すれば、この句は、北魏時代に集中して見られ、東西魏以降は、ほとんど皆無に等しいほど見られなくなるのが明らかである。用例としては、「上生天上、值遇諸佛」、「上生天上、值遇彌勒」、「上生天上、下生人中」などがある。

「天宮」は、佛典においても古くから様々な經典に頻出する語である。中國古典では、『史記』卷二八・封禪書「天神貴者太一」に對する、司馬貞『史記索隱』所引『樂汁徵圖』⁽²¹⁾に、「天宮、紫微。北極、天一太一」とあるように緯書に見え、「紫微」と同義であるとしている。造像銘において、この語は、「敬造天宮一區」、「敬造天宮塔一區」など、塔・浮圖、あるいは四面像とほぼ同様の意味で用いられることが多い⁽²²⁾。一方、この語を生まれかわり先を表す語として用いる造像銘の初出は、太和十四年（490）魯氏造像記に「如入禪定、神昇天宮、彌勒初會」とあるもので⁽²³⁾、北魏時代には 6 件あるが、東西魏以降は見られなくなる。

「天堂」については、初出は上記の語に比べてやや遅れ、北魏太和二十年（496）の紀年を有する道教像である姚伯多造像記⁽²⁴⁾であり、他の道教像銘にもしばしば見える。佛像における初出は、景明四年（503）閻村邑子七十二人等造像記⁽²⁵⁾である。「福堂」という語の初出はさらに遅れ、永熙二年（533）僂蒙文姬合邑子三十一人造像記⁽²⁶⁾である。地域的には、陝西と河南に多く、逆に河北には見えない。決まった四字の定型句はなく、「葺入天堂」、「神生天堂」、「神昇福堂」、「永處福堂」、「上生天堂」などの事例が見える。

「紫微」や「紫宮」は、『淮南子』天文訓に「紫宮者、太一之居也」とあり、『列子』周穆王に「王實以爲清都・紫微・鈞天・廣樂、帝之所居」とあるように、中國古典において既に天帝・太一の居處として見える語である。「紫極」も『抱朴子』を始めとし、道教經典にも多く見えるが、南北朝時代以前の翻譯佛典には使用された形跡がない。天上世界という意味での「紫蓮」については、中國古典にも見られず、佛教經典についても北魏以前の古い適当な用例は見当たらず、典據不明であるが、上記の「紫微」や「紫宮」と、佛教の「蓮華」のイメージが混合した表現かもしれない。これらの語の約半数は道教造像銘に現れ、地域的にも道教像の多い陝西や河南に多く、河北には見えない。初出はやや遅れ、永平四年（511）比丘

表1 天・淨土關連用語の地域・王朝別件数

分類	用語	河北	山東(+江蘇)	河南(+安徽湖北)	山西	陝西	甘肅	不明	合計	南朝
		北魏	北魏	北魏	北魏	北魏	北魏	北魏	北魏	南齊
		東魏	東魏	東魏	東魏	東魏	東魏	東魏	東魏	南齊
		北齊	北齊	北齊	北齊	北齊	北齊	北齊	北齊	南齊
		北周	北周	北周	北周	北周	北周	北周	北周	南齊
		北周	北周	北周	北周	北周	北周	北周	北周	南齊
		北周	北周	北周	北周	北周	北周	北周	北周	南齊
天	興率	1	2	3	1	2	2	1	8	1
	天	4	2	7	2	2	2	5	20	2
	天上	4	3	2	2	1	1	4	20	10
	天宮	6	3	5	4	4	2	2	21	0
	天堂	1	1	3	2	3	1	2	6	0
	天堂	1	1	3	2	3	1	2	6	0
	天堂	1	1	3	2	3	1	2	6	0
	天堂	1	1	3	2	3	1	2	6	0
その他	境(妙境、淨境など)	1	2	9	1	1	1	2	16	1
	三空・九空	2	1	2	1	1	1	2	3	0
	西方	5	4	10	2	2	5	6	29	5
	妙樂(妙洛)	3	7	6	1	1	1	1	15	17
	淨土(淨土)	1	2	1	1	1	5	3	15	10
	淨國、淨妙、淨妙國土	1	2	1	1	2	4	1	7	4
	淨土、淨妙、淨妙國土	1	2	1	1	2	4	1	7	4
	佛土、佛國、淨佛國土	1	4	2	1	2	2	1	11	2
	佛土、佛國、淨佛國土	1	4	2	1	2	2	1	11	2
	無量(壽)(佛)國※	1	1	3	1	2	2	1	4	1
	安養	1	1	3	1	2	2	1	4	1
	安樂	1	1	6	1	1	1	1	5	1
	安樂	1	1	6	1	1	1	1	5	1
神	神	2	3	1	1	1	1	1	6	1
	神	1	2	9	1	4	1	4	21	3
	神	1	2	9	1	4	1	4	21	3
	神	1	2	9	1	4	1	4	21	3
	神	1	2	9	1	4	1	4	21	3
	神	1	2	9	1	4	1	4	21	3
生	往生	4	1	10	2	2	5	6	29	4
	往生	4	1	10	2	2	5	6	29	4
	往生	4	1	10	2	2	5	6	29	4
	往生	4	1	10	2	2	5	6	29	4
	往生	4	1	10	2	2	5	6	29	4
	往生	4	1	10	2	2	5	6	29	4
生	託生(托生)	3	7	4	1	5	1	1	15	7
	託生(托生)	3	7	4	1	5	1	1	15	7
	託生(托生)	3	7	4	1	5	1	1	15	7
	託生(托生)	3	7	4	1	5	1	1	15	7
	託生(托生)	3	7	4	1	5	1	1	15	7
	託生(托生)	3	7	4	1	5	1	1	15	7
生	直生(直生)	1	2	2	1	2	1	1	7	2
	直生(直生)	1	2	2	1	2	1	1	7	2
	直生(直生)	1	2	2	1	2	1	1	7	2
	直生(直生)	1	2	2	1	2	1	1	7	2
	直生(直生)	1	2	2	1	2	1	1	7	2
	直生(直生)	1	2	2	1	2	1	1	7	2
あ	上生	5	2	3	1	5	2	4	20	1
	上生	5	2	3	1	5	2	4	20	1
	上生	5	2	3	1	5	2	4	20	1
	上生	5	2	3	1	5	2	4	20	1
	上生	5	2	3	1	5	2	4	20	1
	上生	5	2	3	1	5	2	4	20	1
あ	○登	3	1	1	2	1	1	1	7	10
	○登	3	1	1	2	1	1	1	7	10
	○登	3	1	1	2	1	1	1	7	10
	○登	3	1	1	2	1	1	1	7	10
	○登	3	1	1	2	1	1	1	7	10
	○登	3	1	1	2	1	1	1	7	10
あ	○昇	5	1	4	2	3	1	1	13	11
	○昇	5	1	4	2	3	1	1	13	11
	○昇	5	1	4	2	3	1	1	13	11
	○昇	5	1	4	2	3	1	1	13	11
	○昇	5	1	4	2	3	1	1	13	11
	○昇	5	1	4	2	3	1	1	13	11
あ	○騰	1	1	8	1	1	1	1	9	2
	○騰	1	1	8	1	1	1	1	9	2
	○騰	1	1	8	1	1	1	1	9	2
	○騰	1	1	8	1	1	1	1	9	2
	○騰	1	1	8	1	1	1	1	9	2
	○騰	1	1	8	1	1	1	1	9	2
あ	(生天・淨土、彌勒下生信仰を有する造像記)の總数	24	27	65	9	8	5	3	185	65
	(生天・淨土、彌勒下生信仰を有する造像記)の總数	24	27	65	9	8	5	3	185	65
	(生天・淨土、彌勒下生信仰を有する造像記)の總数	24	27	65	9	8	5	3	185	65
	(生天・淨土、彌勒下生信仰を有する造像記)の總数	24	27	65	9	8	5	3	185	65
	(生天・淨土、彌勒下生信仰を有する造像記)の總数	24	27	65	9	8	5	3	185	65
	(生天・淨土、彌勒下生信仰を有する造像記)の總数	24	27	65	9	8	5	3	185	65

注1 總数は上記項目の合計ではない。

注2 各項目の件数は重複して数える。

※この項目には阿彌陀佛國も含める。ま2～4も同様。

表2 天・浄土関係用語の用例の出現数とその時代的變化

分類	用語	用例とその件数(多い順)	北涼北魏	東西魏	北齊周	隋	
天	兜率	託生兜率4、上生兜率3、神昇兜率1	4.3%	4.3%	5.9%	1.5%	
	天上	亡(迄)者生天59、亡者昇天2	10.8%	17.2%	19.5%	15.4%	
	天宮	上生天上19、生於天上諸佛之所1、生天上安樂之處1	11.4%	0.0%	0.0%	1.5%	
	天堂	上天宮2、上昇天堂1、神昇天堂1、託生天堂1	3.2%	0.0%	0.0%	0.0%	
	福堂	婁入天堂1、神生天堂1、神昇福堂1、永處福堂1	4.3%	6.9%	2.2%	1.5%	
	紫微・紫宮・紫蓮・紫極	託生紫蓮1、託神紫宮1、託生紫微安樂之處1、登紫極1	3.2%	0.9%	1.6%	0.0%	
	その他	境(妙境、淨境など)	神昇淨境2、遊神淨境2、神翔妙境1、託生善境1	8.6%	5.2%	4.3%	0.0%
		三空・九空	神騰九空2、遊神三空1、神超三空1、粟神三空之城1	1.6%	0.9%	0.5%	0.0%
	浄土	西方	託生西方妙樂(洛)國土34、託生西方23	15.7%	12.9%	22.2%	26.2%
		妙樂(妙洛)	託生西方妙樂(洛)國土34、託生先方妙樂(洛)國土3	8.1%	13.8%	15.7%	15.4%
浄土(靜土)		神生浄土8、託生浄土5、往生浄土3、常生浄土2	3.8%	6.9%	10.8%	21.5%	
浄國、淨妙、淨妙國土		來生浄國2、託生浄(請)妙2、同登浄妙1、上生浄妙國土1	0.5%	4.3%	3.2%	0.0%	
佛土 佛國 浄佛國土		託生佛國3、遊神西方淨佛國土1、上生佛國1	4.9%	0.9%	2.7%	3.1%	
無量(壽)(佛)國		託生西方無量壽國2、往生西方無量壽佛國1	2.2%	2.6%	2.2%	6.2%	
安養		託生安養1 往生安養之國1、神超安養1	2.7%	0.9%	2.2%	4.6%	
安樂		託生西方安樂(洛)之慮3、生天上安樂之處1、常登安樂1	3.2%	1.7%	3.2%	1.5%	
神		神○ ○神	神生浄土8、神昇淨境2、遊神淨境2、神騰九空2	11.4%	16.4%	8.1%	6.2%
		往生	往生浄土3、往生妙樂2、往生西方1、往生安養之國1	0.0%	1.7%	4.3%	6.2%
生まれる	託生(托生)	託生西方妙樂(洛)國土34、託生西方23、託生浄土5	14.1%	17.2%	25.9%	32.3%	
	直生(直生)	直生西方2、直(值)生西方妙樂國土2、直(值)生西方無量壽國2	3.8%	1.7%	1.1%	0.0%	
あがる、のぼる、とぶ	上生 上昇	上生天上19、上昇天堂2、上生天堂2、上生浄妙國土1、上昇人天1	10.8%	3.4%	1.1%	1.5%	
	○登	俱登常樂2、咸登浄土1、神登紫宮1、願登紫極1、永登寶地1	1.1%	6.0%	5.4%	1.5%	
	○昇	同昇妙樂3、同昇常樂(洛)2、神昇淨境2、上昇天堂2	4.3%	12.1%	5.9%	1.5%	
	○騰	雲飛十方4、神騰九空2、騰無哉之境1、騰遊无礙之境1	4.9%	1.7%	1.1%	0.0%	

法興造彌勒像記⁽²⁷⁾に「託生紫蓮」と見える。他の用例としては、「託神紫宮」、「託生紫微安樂之處」、「登紫極」などがあるが、これらの語については、特に定型句的表現はないようである。

彌勒菩薩の居處である兜率天への上生を表す願文については、既に指摘されているように彌勒が將來下生して成佛し、龍華樹の下で說法するという下生信仰よりもやや遅れ⁽²⁸⁾、太和廿二年(498)比丘慧成造像記(始平公像記)⁽²⁹⁾に「鳳翥道場、鸞騰兜率」とあるのが初出である。

b. その他

次に「妙境」と「淨境」であるが、『無量壽經』などの淨土三部經には見えない語である。造像銘の初出は、北魏皇興五年(471)造像記⁽³⁰⁾で、「神期妙境」とある。河南地域で多く、また、「神昇淨境」、「遊神淨境」など、「神」とともに用いられる場合が多い。時代が下るにつれ減少傾向にある。

「三空」と「九空」は出現数がわずかであり、初出は北魏景明三年(502)龍門石窟古陽洞の孫秋生造像記⁽³¹⁾に「來身神騰九空、迹登十地」とある。「三空」の方は正光四年(523)青龍魏碑⁽³²⁾が初出であり「遊神三空、縱志八定」とある。やはり時代が下るにつれ減少傾向にある。

これら「境」や「空」とともにしばしば出現する「神」についての項目を見ると、初出は先述の北魏皇興五年(471)造像記の「神期妙境」であるが、北魏正光元年(520)王富如造像記⁽³³⁾が初出である「神生淨土」という語が8件と最も多い。

c. 淨土関連の用語

次に、淨土関連の語について見ていきたい。佛典には、「淨土」、「極樂」、「佛土」、「安樂」、「安養」など様々な淨土・佛國土を表す語が用いられているが、淨土三部經のうち、『無量壽經』では、西方淨土を指す譯語として、「安養」や「安樂」、『阿彌陀經』と『觀經』では、「極樂」が主に用いられている⁽³⁴⁾。一方、北朝造像銘において淨土に生まれかわることを表す最も多出する定型句は「託生西方妙樂(洛)國土」であり、筆者が収集しえたのは34例である。造像銘における初出は、雲岡石窟第十八窟門口龕像に「、方妙□□、」の銘文が見えるのがこれに相當する可能性があ

るが、確實な紀年を有するものでは、北魏太和廿二年（498）の肥如縣比丘僧造像記であり、この「妙樂」という佛國土の表現が、淨土三部經には見えず、特に『大方等陀羅尼經』に「西方妙樂世界」と見える特殊な語であることが久野美樹氏により指摘されている⁽³⁵⁾。表1を参照すれば分かるように、南朝の有紀年造像銘において、「妙樂」が使われていないのも、この語の特殊性を裏付ける。

「託生西方妙樂（洛）國土」の次に多いのは「託生西方」の23例である。「西方」の初出は、延興五年（475）□丘縣人徐敬姬造像記⁽³⁶⁾で、「願生西方、常與弗會、龍花樹下□共□」と彌勒下生信仰の願目とともに見える。「願使亡者上生天上、託生西方、侍佛佐右」⁽³⁷⁾など、天上世界と混合したイメージで用いられている事例もいくつか見られる。時代が下るにつれ、全體に占める割合は増加傾向にある。

「淨土」あるいは「靜土」という語の初出は、北魏太和八年（484）楊僧昌（揚僧景）造像記⁽³⁸⁾に「遷神淨土」とあるものであり、この年には、南朝の造像記においても「淨土」という語が初めて見える⁽³⁹⁾。「淨土」を用いた四字句で最も多いのは「神生淨土」であり、8例ある。表を参照すると、「淨土」や「靜土」の語は北魏にはあまり使用されていないが、生天・淨土信仰を有する有紀年銘造像全體に占める割合を百分率で見ると（表2参照）、時代が下るにつれ徐々に割合が増加しており、特に北齊から隋にかけて急増し、隋代では2割を越えるまでになる。

「淨國」、「淨妙」、「淨妙國土」については、初出は他の語と比較して遅れ、北魏末期の眞王五年（528）楊天仁等二百人邑義造像記⁽⁴⁰⁾であり、邑義たちが物故せし邑義（亡邑義）のために彌勒像を造り、上は皇家、下は受苦蒼生、見在の邑義が「同に淨國に生ぜん」と願ったとある。『觀經』は、十方諸佛の淨土として「淨妙國土」という語を用いているが、造像記における「淨妙」の初出は「淨國」よりもさらに遅れ、東魏興和二年（540）邱廣壽造像記⁽⁴¹⁾に「願亡考上生淨妙國土」とあるのが最初である。また、これらの語の特徴として、河北地方とそれに隣接する山東地域に集中して現れ、南朝造像記にも見えないことをあげることができる。

「佛土」、「佛國」、「淨佛國土」について、「無量壽佛國」、「無量佛國」は次に述べるので除外すると、「太歲丁未」（西暦527年に比定できる）の石黑奴造像記⁽⁴²⁾に「願直生西方淨佛國土、蓮花化生、謔受妙法、供養三寶、

龍花三會、願在初首、見諦得道、歷侍諸佛」とあるのが初出である。この語については、地域的には、「淨國」、「淨妙」よりも廣範に見られ、北魏時代に比較的多く、南朝造像記にも見られる。

「無量壽國」、「無量（壽）佛國」については、ともに『無量壽經』に見える語であり、無量壽佛の淨土であることを主張しているという点で重要であるが、初出は太和二年（478）造像記⁽⁴³⁾と早く、南朝では、さらに遡る劉宋元嘉廿五年（448）の造無量壽像記⁽⁴⁴⁾に、「爲父母并熊身及兒子起願無亮壽佛國生」と、無量壽佛國に生まれることを願っている。この語は、そのほとんどが「西方」と結びついて「西方無量壽佛國」などと表現される。隋代に入ってこの語の見える造像銘が増加するのも見逃せない。ただし、北魏永安二年（529）の紀年を有する造像記⁽⁴⁵⁾に「上爲國主大臣、下爲七世以來所生父母見在眷屬并及諸師上生兜卒、又上一切諸師伏問法、下生西方阿彌陀伏國、隨樂心所、有刑並同蒙福、所願如是」とあり、無量壽ではなく阿彌陀の語を使用しているものもある。

「安養」については、竺法護譯『正法華經』藥王菩薩品に「若有女人、於五濁世最後末俗、聞是經法能奉行者、於是壽終生安養國、見無量壽佛」[T9:126c]と見え、『無量壽經』巻中にも同様に西方淨土を指す語として使用されている。造像銘においては、「安養」を單獨で用いて「託生安養」、「願生安養」などとする例が最も多く、次いで「安養之國」という事例が多い。「安養之國」という語は、南北朝以前の經典では、竺法護譯『文殊師利佛土嚴淨經』にのみ「西方安養之國」として見える。中には「生天安養佛國」と、天と同様に見なしているものもある⁽⁴⁶⁾。造像銘の初出は雲岡石窟太和七年（483）邑義信士女等五十四人造像記であり、「安養光接」と見える。地域的には河南、山西に多い。

「安樂」という語は、藤田宏達氏の著書の141頁以下の表を参照すれば分かるように⁽⁴⁷⁾、玄奘の時代より古い漢譯經典において淨土の譯語として非常に多く用いられており、『無量壽經』巻上にも「佛告阿難、法藏菩薩今已成佛、現在西方、去此十萬億刹、其佛世界名曰安樂」[T12:270a]と見える。また曇鸞、道綽、善導の三師ともに、この語を西方淨土を表す語として多用している。一方造像銘においては、經典に類出する割には、この語はそれほど使用例が多くない。「託生西方安樂（洛）之處」という事例が3例と最も多いが、「安養」と同様、「生天上安樂之處」と天を指し

て用いられる場合もある。

最後に、北齊天保六年（555）造像記には、「捨此身已、往生西方極樂世界」という、『觀經』や『阿彌陀經』に見える「極樂」の語を使用した北朝造像銘で唯一の事例があり、これは久野美樹氏によって新しい浄土信仰を表すメルクマールとなる作例であるとされている⁽⁴⁸⁾。

d. 浄土に生まれ変わることを表す動詞

天や浄土に生まれることを表す動詞「往生」、「託生」、「直生」について、浄土三部經で主に用いられているのは「往生」であり、「託生」や「直生」は見えない。「往生」について、「所往生□、値遇諸佛」という事例は早く北魏太安三年（457）の造像記⁽⁴⁹⁾に見えるが、「往生」＋「天・浄土を表す名詞」の組み合わせの初出は、敦煌石窟の西魏大統三年（537）造無量壽像記⁽⁵⁰⁾に「往生妙樂」と見えるものであり、かなり遅れる。この語は北朝時代を通じて件数は少ないものの、時代が下るにつれ全體に占める割合は増加傾向にある。

「託生」は浄土三部經には見えない語だが、『莊子』天地に「神全者、聖人之道也。託生與民並行而不知其所之」とあるように、意味は異なるものの中國古典の典據を有する語であり、かつ、『彌勒下生成佛經』などの佛典にも用例がある。北朝造像銘においては、この語が多用されており、時代が下るにつれその割合は増加傾向にある。

「直生」は南北朝の經典にはほとんど見えず、『觀佛三昧海經』觀相品「受罪畢訖、直生人中」[T15:652a]、『賢愚經』無惱指鬘品「有一祕法、由來未說、若能成辦、直生梵天」[T04:423c]などの用例があるにすぎない。初出は龍門石窟古陽洞の太和廿年（496）一佛造像記⁽⁵¹⁾であるが、上記二語と異なり時代が下るにつれ減少傾向にある。

e. 上昇を表す用語

次に、天のイメージと関連する、上にあがることを表す語として、「上昇」、「上生」、「騰」、「飛」、「登」、「昇」などがある。このうち、「上昇」、「上生」、「騰」、「飛」は北魏時代かなり多く見えるものの、東西魏以降激減する。「登」や「昇」は、「常樂」や「妙樂」と結びつく事例が比較的多く、北齊代までは増加するが、隋代では總じて少なくなる。その他の、

「境」や「三空」、「九空」なども時代が下るにつれ減少傾向を示しており、「神」という語を使用する事例も同様に減少傾向を示している。

以上の議論を總體的に見ると、529年以前は天に生まれたいとする信仰が比較的流行し、529年以降は西方浄土の信徒が優勢になるという侯旭東氏の結論はおおむね正しいことが確認できるが、より具体的な用語に即して検討を加えた結果、明らかになったことを筆者なりにまとめてみたい。

天に関しては、北魏時代、河南や陝西の造像銘を中心に、「天」、「天上」、「天宮」、「天堂」、「紫微」など、様々な用語が使用されていた。特に多いのは、「亡者生天」と「上生天上」という四字句である。東西魏以降になると、「上生天上」を始めとして天に関する語は非常に少なくなり、最もシンプルな表現と言える「亡者生天」のみが隋代まで、とりわけ北齊時代に河北地方において多く使用された。つまり、造像銘を見る限りでは、天に対する思想・信仰の新たな展開はなく、淘汰が行われたと言える。また、天のイメージと関連する上にあがることを表す語として、「上昇」、「上生」、「騰」、「飛」は東西魏以降激減し、「登」や「昇」は、「常樂」や「妙樂」と結びつく事例が比較的多く、北齊代までは増加するが、隋代では總じて少なくなる。その他の、「境」、「三空」、「九空」なども時代が下るにつれ減少傾向を示しており、「神」という語を使用する事例も同様に減少傾向を示している。

一方、浄土関連の語は、經典に多用されている「安樂」が造像銘であまり用いられていないことに代表されるように、經典と造像銘で、多用される語の間にはかなりの相違があることが分かる。「浄國」、「浄妙」、「浄妙國土」の項目と「安樂」の項目を除けば、割合で見ると總じて増加傾向にあり、動詞では、「託生」や「往生」の使用される割合が増加する。北朝時代においては、「妙樂」、とりわけ「託生西方妙樂國土」という定型句が最も多く使用されているが、隋代になると、むしろ「西方」や「浄土」が特に増加し、「妙樂」よりも多くなる。また、北齊から隋にかけての「無量壽佛國」の割合の増加も、浄土の教主が誰であることを表明している点で見逃すことができない。このような「天→浄土」という變容を最も端的に表しているのが陝西の造像銘である。

また、浄土を表す用語に関しては、河北地域において最も種類が豊富と

言えるが、特に北齊時代の河北地域におけるそれが注目される。この地域では、北齊時代、天に関する用語はほぼ「亡者生天」に限られる一方、浄土については様々な用語が数多く確認されるのである。この北齊時代の河北地域の造像銘を中心として、西方浄土の佛の尊名が「無量壽」から「阿彌陀」にかわるという重要な變化が起こっている。こうした用語や尊名の變化が果たしていかなる浄土に関する思想・信仰の變容を背景としているのか、特に無量壽・阿彌陀を尊名として記す造像銘に對象をしぼって筆者は前稿において考察したことは前述したとおりである。

二 龍門石窟における北魏から唐にかけての生天・浄土信仰の變容

次に龍門石窟紀年造像銘を資料として、北魏から唐にかけて生天・浄土信仰にいかなる變化があったかを調べてみたい。龍門石窟の造像銘は、北魏と唐が突出して多く、東西魏分裂以後、隋までの数が少ないことが特徴である。筆者が今回資料とした龍門紀年造像銘（一部紀年を推定したものも含む）は北魏 196 件、東魏 12 件、西魏 6 件、北齊 19 件、隋 3 件、唐 506 件である。北朝（ほとんどが北魏）については表 3 に、唐については表 4 にそれぞれ、天、あるいは浄土に生まれかわることを願う語句を抽出し、その件数を示した。項目ごとの増減を考慮するに当たっては、この造像記の總數の増加も考慮に入れつつ以下の表を参照していただきたい。

【尊名略稱一覽】

阿：阿彌陀 釋：釋迦 勒：彌勒 盧：盧舍那 觀：觀音
 優：優填王 救：救苦觀音 像：尊名不明 無：無量壽 頂：佛頂尊勝陀羅尼經

表 3 龍門石窟北朝紀年造像銘に見える天・淨土關連の用語

	用語	出現数	用例 (多い順) () 内は尊名略稱と紀年 (西暦) を示す。
天	兜率	3	鸞騰兜率 (像 498)、神昇兜率 (勒 511)、同生兜率 (勒 534)
	天	4	亡 (妄) 者生天 (勒 502、釋 525、無 527、觀 529)
	天上	4	上生天上 2 (釋 504 ; 506)、生於天上諸佛之所 (勒 495)、託生天上安樂之處 (釋 533)
	紫微・紫蓮・紫極	3	託生紫蓮 (勒 511)、託生紫微安樂之處 (勒 512)、登紫極 (觀 526)
その他	境 (妙境、淨境など)	5	騰遊无礙之境 (勒 495)、騰無哉之境 (像 520)、即彼眞境 (像 511)、昇彼淨境 (勒 519)、恆生淨境 (勒 528)
	三空・九空	3	神騰九空 2 (像 502 ; 502)、稟神三空之域 (像 553)
	その他	2	速勝妙景 (無 519)、託生寶輪 (像 526)
淨土	西方	11	託生西方妙樂 (洛) 國土 5 (勒 510 ; 511、釋 510 ; 537、像 513)、託生西方 2 (釋 508、像 518)、託生西方淨洛國土 (像 513)、託生西方安樂之處 (釋 532)、神生西方靜土 (釋 533)、託生西方□□□□□□淨之處 (釋 524)
	妙樂 (妙洛)	7	託生西方妙樂 (洛) 國土 5 (勒 510 ; 511、釋 510 ; 537、像 513)、值生妙樂國土 (釋 506)、妙樂自在之處 (勒 495)
	淨土 (靜土)	1	神生西方靜土 (釋 533)
	淨國、淨妙、淨妙國土	0	なし
	佛土 佛國 淨佛國土	1	直生佛國 (像 496)
	無量 (壽) (佛) 國	0	なし
	安養	1	願生安養 (像 527)
安樂 (洛)	5	常在安樂之處 (勒 498)、託生紫微安樂之處 (勒 512)、託生安樂處 (觀 531)、託生西方安樂之處 (釋 532)、託生天上安樂之處 (釋 533)	

神	神○ ○神	7	神騰九空 2 (像 502:502)、神飛三光 (像 498)、神超蔭海 (釋 532)、神生西方淨土 (釋 533)、神□超蔭 (像 537)、稟神三空之域 (像 553)
生まれる	往生	0	なし
	託生 (托生)	17	託生西方妙樂 (洛) 國土 5 (勒 510:511、釋 510:537、像 513)、託生西方 2 (釋 508、像 518)、若存託生生於天上諸佛之所 (勒 495)、託生紫蓮 (勒 511)、託生□□國土 (像 511)、託生紫微安樂之處 (勒 512)、託生西方淨洛國土 (像 513)、託生安樂處 (觀 531)、託生西方□□□□□淨之處 (釋 524)、託生寶輪 (像 526)、託生西方安樂之處 (釋 532)、託生天上安樂之處 (釋 533)
	直生 (值生)	2	直生佛國 (像 496)、值生妙樂國土 (釋 506)
あがる、のぼる、とぶ	上生 上昇	2	上生天上 2 (釋 504:506)
	○登	1	登紫極 (觀 526)
	○昇 昇○	2	昇超遐迹 (像 507)、昇彼淨境 (勒 519)
	○騰 騰○ ○飛 (非)	5	神騰九空 (像 502:502)、騰遊無礙之境 (勒 495)、騰無哉之境 (像 520)、神飛三光 (像 498)

表 4 龍門石窟唐代紀年造像銘に見える天・淨土関連の用語

	用語	出現数	用例 (多い順)
天	兜率、忉利	2	希昇兜率之天 (勒 683)、上昇忉利 (阿 715)
	天	2	亡者生天? (阿 662)、生天受福 (阿 654)
	天上	0	なし
	紫微・紫蓮・紫極	0	なし
その他	境 (妙境、淨境など)	5	洞希淨境 (像 650)、靈往淨境 (阿 653)、靈化淨境 (優 656)、俱昇淨境 (阿 675)、征驂於淨境 (像 692-693)
	三空・九空	0	なし
	その他	1	身託四生 (像 710)

淨土	西方	12	託(托)生西方5(阿658:659:666、優659、像690-704)、往生西方3(盧662、像686、阿693)、結願於西方(阿675)、託生西方妙樂國土(阿676)、託生西方極樂淨土界(頂692)、西方豈遙(阿694)
	妙樂(妙洛)	3	願生妙樂國土(阿648)、方稱妙樂(阿675)、託生西方妙樂國土(阿676)
	淨土(靜土)	19	往生淨土5(阿651:658:660、救651、像654)、神生淨土4(像649、阿653:673、勒696)、得生淨土2(阿653:654)、俱沾淨土(像646)、淨土□啓(勒648)、善生淨土(像653)、早生淨土(救657)、過往先靈身生淨土(釋657)、齊生淨土(阿658)、復登淨土(盧662)、託生西方極樂淨土界(頂692)
	淨國、淨妙、淨妙國土	1	往生淨國(像703)
	佛土 佛國 淨佛國土	2	往生淨佛國土(像648)、上品往生諸佛國土(阿658)
	無量(壽)(佛)國	2	當來往生無量壽國(阿648)、同得往生阿彌陀佛國(阿675)
	淨域	2	俱登淨域(阿667)、永安淨域(阿669)
	淨刹	2	升淨刹(像651)、遊神淨刹(優656)
	安養	0	なし
	安樂(洛)	0	なし
神	神○ ○神 靈	10	神生淨土4(像649、阿653:673:696)、遊神淨刹(優656)、靈往淨境(阿653)、靈化淨境(優656)、過往先靈身生淨土(釋657)、七祖先靈並願上品往生諸佛國土(阿658)、先靈往生淨土(阿658)
生まれる	往生	17	往生淨土5(阿651:658:660、救651、像654)、往生西方3(盧662、像686、阿693)、上品往生3(觀652:681、救657)、七祖先靈並願上品往生諸佛國土(阿658)、當來往生無量壽國(阿648)、同得往生阿彌陀佛國(阿675)、當來往生(像649)、往生淨佛國土(像648)、悉皆迴願往生(像660)
	託生(托生)	8	託(托)生西方5(阿658:659:666、優659、像690-704)、託生□□(阿656)、託生西方妙樂國土(阿676)、託生西方極樂淨土界(頂692)
	直生(值生)	0	なし

のぼる、とぶ	上生 上昇	1	上昇切利 (阿 715)
	○登	2	復登淨土 (盧 662)、俱登淨域 (阿 667)
	○昇 昇○	2	俱昇淨境 (阿 675)、希昇兜率之天 (勒 683)
	○騰 騰○	0	なし
	○飛 (非)		

以上の表3、表4より読み取ることができることを簡條書きにして以下に示そう。

- ① 天のカテゴリーに関して、北魏で少なからず見られた天に生まれかわることを願うものは、唐代ではわずか4例となる。そのうち2例は「兜率」や「切利」というように具体的な天の名を明示している。また、北魏に見られた、「上生天上」、「紫微」、「紫蓮」、「紫極」などは唐では見られなくなり、天に生まれかわることを願う信仰は淨土信仰の流行にともない下火になっている。「境」の項目についても、北魏では「眞境」「无礙之境」「無哉之境」など、様々な用語が見られたが、唐は淨土に近い意味の「淨境」に集中し5件見られる。北魏に見られた三空・九空についても見られなくなる。
- ② 北魏時代においては、「淨妙」「淨土」「安養」など、佛典に類出する淨土関係の語は少なく、龍門北朝有紀年造像銘ではたった1件だった「淨土 (靜土)」が、唐では19件に急増する。また、唐代では、「淨域」、「淨刹」、「淨土界」など淨土を表す用語のバリエーションが増える。「當來往生無量壽國」「同得往生阿彌陀佛國」「託生西方極樂淨土界」「結願於西方」など、強い阿彌陀佛淨土信仰を表明するものも表れる。「妙樂 (洛)」は、北魏の7件から唐の3件に減少している。
- ③ 生まれかわりを表す動詞に関して、北魏では「託生」がほとんど、「直 (値) 生」が2例で佛典に類出する「往生」の語はなかった。唐では「往生」が急増し「託生」の約2倍の多さである。また唐代には、「上品往生」という、『觀經』を意識した表現も見られるようになる。生まれかわる主體については、北魏の「神」に加えて、唐代では「靈」が淨土に生まれることを願うものが増加している。
- ④ 「淨土」関係の語を有する像の尊格に関しては、北魏では、釋迦、彌勒が多く、唐代では當然阿彌陀が多いが、救苦觀音、彌勒、釋迦、盧

舍那など様々な尊格に見られる。

以上、要するに、龍門唐代造像銘においては、死後の世界に關して、北魏造像銘に見られた「天」や「紫微」その他様々な理想郷を示す語が大部分淘汰され、佛典によく使われる、「淨土」という語に集中するようになっていく。唐代佛教徒にとって死後の理想的世界としての淨土に對する理解は北魏と比較して確實に深まっていると言えよう。これは、第一節で見たように、龍門に限らず、華北地域一般に北魏以降の全般的傾向として見られる現象であり、特に北齊後半期以後その傾向が著しい。つまり、龍門石窟についてもそうした北朝以來の淨土信仰の隆盛の様相が反映されているのである。

ただ、問題は、阿彌陀像の多さに限らず、以上のような「淨土」や「往生」といった語の多さをどのように説明するかである。そこに善導の淨土教の影響をいかに見るべきかということが特に問題となろう。表4を見れば分かるように、「淨土」關連の用語の出現する年代に注目すると、650年から660年頃、高宗の前期にピークを迎える。當然そこには、造像のピーク自體が660年代にあるということもふまえなければならない。650年頃には、善導は長安にてさかんに淨土教を廣めており、道宣も彼に注目し、『續高僧傳』に記録しているほどである。しかしながら、650年代當時、淨土信仰自體は、すでに廣汎な廣がりを見せており、善導が出現して淨土信仰が廣がったわけではない⁽⁵²⁾。善導はこの當時長安を據點に活動していたが、650～660年代の龍門石窟造像銘の「淨土」等の用語の多さに、善導淨土教の影響をいかに考えるかは今後檢證すべき問題である。以下で見るように、善導淨土教の信奉者が直接造營に關與したことを示す窟は、それまでとは一線を畫する形式を有しており、また、この時期以降に同様の形式の窟が見られるようになるのである。

三 善導淨土教信奉者の龍門石窟造營關與を示す新資料

善導が勅命により龍門石窟のシンボルとも言える奉先寺盧舍那大佛造營の檢校僧に任ぜられたことは夙に有名である。そのことを記した造像記を以下に示そう。

龍門山之陽 大盧舍那像龕者、大唐天皇帝之所建也。佛身通光座高八十五尺、二菩薩高七十尺、迦葉阿難金剛神王各高五十尺。粵以咸亨三年壬申之歲四月一日皇后武氏助脂粉錢二萬貫、奉敕檢校僧西京實際寺善道禪師、法海寺主惠暕法師、大使司農寺卿韋機、副使東面監上柱國樊玄則、支料匠李君瓚、成仁威、姚師積等、至上元二年乙亥十二月卅日畢功。〔彙錄〕1635)

この資料からは盧舍那大佛造營の檢校僧（いわば總監督）として、法海寺主惠暕（惠簡）とともに當時長安の實際寺に住していた善導が勅命により拔擢されたことがわかる。咸亨三年（672）武后が化粧料二萬貫を喜捨し、完成したのが上元二年（675）であり、この大事業により、龍門石窟ひいては洛陽においても善導の名聲がより一層高まったことは想像に難くない。

これまで、唐代龍門石窟における阿彌陀造像の多さや淨土関連の造像には、善導淨土教の影響ということがしばしば指摘されてきた。夙に塚本善隆氏は龍門石窟の造像の中心が北魏の釋迦・彌勒から唐代の阿彌陀へと移ったことに善導淨土教の影響を見出している。また、曾布川氏は「これら（清明寺洞や淨土堂の阿彌陀を中心とした窟）の造像は、無論、高宗時代の善導や、武周期の善導門下の高足による淨土教の目覺ましい流行を背景として」いたとする⁽⁵³⁾。また、李姪恩氏も、善導は「觀淨土」の重要性を強調し、これが、「觀佛」から「觀淨土」への藝術實踐活動の變化を促進し、第一（約 640-660）、二期（約 660-683）の「造佛像」から、第三（約 684-704）、四期（約 704-745）の「浮彫淨土變」へという大きな變化と密接に関係していると指摘する⁽⁵⁴⁾。そして、西方淨土變の彫刻の具體的事例として、高平郡王洞、北市綵帛行淨土堂、西方淨土變龕を挙げる。

唐代龍門石窟において、善導淨土教の影響があったことはほぼ誰もが認めるが、具體的に、いつ頃にそれを認めるかという点については、それぞれ研究者によって意見が分かれるところである。

今回、筆者がとりあげる第 1074 窟（圖 1 参照）は、像が全く残っていないにもかかわらず、善導淨土教を信奉する僧が龍門石窟の淨土造像に直接的に関わっていたことを示す極めて注目すべき窟である。この窟は久野氏によって初めて本格的に研究對象としてとりあげられたが、後述するよ

うに、この窟の銘文が有する重要性については、いまだ十分明らかにされていないと思われる。

最初に窟の概要を説明しよう。この窟の大きさは、幅 200cm、奥行き 235cm、高さ 188cm である。天井には三重の蓮瓣が浮彫されている。龕中程の床面には小さな八角形の穴が 11 箇所ある。久野氏はこれについて、浄土を表現したことが確實な高平郡王洞の床面との類似性を指摘し、元來、蓮華座がはめこまれていたと推測する。おそらく床面を寶池に見立てたものであろう。正壁中央部に高さ 90cm、幅 95cm、奥行 71cm の方形の穴があるが、このような事例は、遺灰などを安置したものと推測されている。特に床面の穴の痕跡から、久野氏の指摘通りこの窟全體は元來、浄土を表現していたと考えるのが妥當であろう。

また、床面の左右および奥壁に沿って、大きめの圓形または八角形のくぼみが 9 箇所存在する。これは、おそらく三方にそれぞれ一佛二菩薩像をつくったものであろう。久野氏は、後掲する銘文中に「歸命三佛菩提尊」「釋迦佛」「阿彌陀」「彌□□」とあることなどから、この三佛は釋迦、彌勒、阿彌陀であったと推測する。しかし、この「三佛菩提尊」は、後掲する、その典據である『觀經疏』の文脈では、法身、報身、化身という佛の三身を指す。則天武后后期造營の北市綵帛行浄土堂には、三方の壁面にそれぞれ佛像がもと存在し、これが銘文に「阿彌陀佛像三鋪」とあるのに對應するとされる。つまり、阿彌陀佛を各壁に造っていたのである。このことと、1074 窟も浄土を表現していると考えられることを勘案すれば、この窟も三方に阿彌陀佛像を造ったと考えた方がよいのではないか。さらに、この窟には、窟外の入口上部に造像記が存在する。造像記の保存状態は悪く、缺損部分もかなりあるが、その内容は極めて注目すべきもので



圖 1 1074 窟
(劉景龍、楊超傑『龍門石窟總錄』
中國大百科全書出版社、第 7 卷圖版
186)

ある。

久野氏はこの造像記の典拠を明らかにされておらず、そのため銘文の讀解に誤りも見られるが、筆者の調査によれば、造像記と佛典との對應狀況は以下の表5の通りである。

表5 1074窟造像記とその典拠との對照表

『彙録』1490(窟龕號1074)を實地調査に基づき修正した銘文(／は改行を示す。網掛けは典拠と文字が異なる部分)	典拠 共通する部分に下線(類似するがやや異なる部分には破線)を施す
<p>① 沙門釋慧審勸一切衆生 發願歸三寶。道俗時來等、各發無上心、 生死甚難厭、／佛法復難欣、共發金剛志、 橫超斷四流、願入彌陀□、歸依合掌禮。 世尊我一心、歸／命盡十方、法性眞如海、 報化等諸佛、<u>一二</u>菩提身、眷□□無量、 莊嚴及變化、<u>十地三</u>賢海、時劫滿未滿、 智行圓未圓、正使盡未盡、習氣□未亡、 功用無功用、證智未證智／智、妙覺及等覺、 正受金剛心、相應一念後、果德□□者、 我等咸歸命、三佛菩提尊、／無礙神通力、 冥加願攝受。我等咸歸命、<u>三乘等</u>賢聖、 學佛大悲心、長時無退者、／請願遙加備、 念念見諸佛。我等愚癡身、曠・・・轉、 今逢釋迦佛、末法之遺□、彌／陀本誓願、 極樂之要門、定散等迴向、 我依菩薩藏、頓教一乘海、發願／歸三寶、 與佛心相應。十方恆沙□ ・乘二尊教、廣流淨土門。願以此／功德、 平等施一切、同發菩提心、</p>	<p>『觀無量壽佛經疏』卷一 [T37:245c8-246a] 先勸大眾 發願歸三寶。道俗時來等、各發無上心、 生死甚難厭、佛法復難欣、共發金剛志、 橫超斷四流、願入彌陀界、歸依合掌禮。 世尊我一心、歸命盡十方、法性眞如海、 報化等諸佛、<u>一二</u>菩提身、眷屬等無量、 莊嚴及變化、<u>十地三</u>賢海、時劫滿未滿、 智行圓未圓、正使盡未盡、習氣亡未亡、 功用無功用、證智未證智、妙覺及等覺、 正受金剛心、相應一念後、果德涅槃者。 我等咸歸命、三佛菩提尊、無礙神通力、 冥加願攝受。我等咸歸命、<u>三乘等</u>賢聖、 學佛大悲心、長時無退者、請願遙加備、 念念見諸佛。我等愚癡身、曠劫來流轉、 今逢釋迦佛、末法之遺跡、彌陀本誓願、 極樂之要門、定散等迴向、速證無生身。 我依菩薩藏、頓教一乘海、說偈歸三寶、 與佛心相應。十方恆沙佛、六通照知我、 今乘二尊教、廣開淨土門。願以此功德、 平等施一切、同發菩提心、往生安樂國。</p>
<p>②・・□發此願者、欲使業影先淳、臨／□終 必會、如樹先傾、倒・・・・・四 十八大願、又依天親菩薩廿／四願、如一一 願不依・・・・・名極樂、 佛号阿彌陀、依正／二報莊嚴及眷・・・ ・・・・・雜經疏等二百卷 於一万／季後法滅盡・・・・・ ・・・・・經五万卷了、誦阿彌陀／經 千 万・・・・・ ・・宿命、還來此界、開此經／藏・・</p>	<p>『阿彌陀經』 [T12:346c] 從是西方過十萬億佛土、有世界名曰極樂。其 土有佛、號阿彌陀、今現在說法。</p>

<p>③</p> <p>.....</p> <p>得因緣則生。何以故。不／.....</p> <p>..... 生、捨淨土命、</p> <p>隨願得生三／.....</p> <p>..... 彌陀佛善力住持故。</p>	<p>『淨土論註』卷下 [T40:838a]</p> <p>「莊嚴主功德成就者、偈言正覺阿彌陀法王善住持故」。此云何不思議。正覺阿彌陀不可思議。彼安樂淨土爲正覺阿彌陀善力住持。云何可得思議耶。住名不異不滅。持名不散不失。如以不朽藥塗種子、在水不爛、在火不焦。得因緣則生。何以故。不朽藥力故。若人一生安樂淨土、後時意願生三界、教化衆生、捨淨土命、隨願得生、雖生三界雜生水火中、無上菩提種子畢竟不朽。何以故。以逕正覺阿彌陀善住持故。</p>
<p>④用斯／.....</p> <p>..... □天后聖代無窮 皇太／.....</p> <p>..... 相常居祿</p> <p>位、師僧父母七代／.....</p> <p>..... □□</p>	
<p>⑤</p> <p>依經讀□万年三寶滅／.....</p> <p>.....</p> <p>佛世甚難值、人有信慧難、遇聞／.....</p> <p>..... 悲傳普化、</p> <p>真誠報佛恩、□／.....</p> <p>..... 人李猷</p>	<p>『往生禮讚』 [T47:441c-442a]</p> <p>萬年三寶滅、此經住百年、爾時聞一念、皆當得生彼。願共諸衆生、往生安樂國。南無至心歸命禮西方阿彌陀佛。</p> <p>佛世甚難值、人有信慧難、遇聞希有法、此復最爲難。願共諸衆生、往生安樂國。南無至心歸命禮西方阿彌陀佛。</p> <p>自信教人信、難中轉更難、大悲傳普化、真誠報佛恩。願共諸衆生、往生安樂國。</p>

すなわち、①の部分は、善導『觀經疏』の冒頭、いわゆる十四行偈を、慧審自ら大衆に勧める主體と設定しつつ、ほぼそのまま引用したものである。②の部分は、缺損部分が多く詳細は不明だが、推測すると、寫經や阿彌陀經讀誦の功德を積み、またこの世界に生まれかわって『阿彌陀經』を開演したいという願いを述べたものであろうか。③は對應する典據である曇鸞『淨土論註』から推測すると、もしひとたび安樂淨土に生まれたならば、衆生を教化するため三界に生まれかわることを願い、淨土での命を捨て、願い通り三界に生まれかわっても、阿彌陀佛の善住持によって、無上菩提種子が畢竟不朽であることを述べたものである。④は、造像の功德を、(天皇)、天后や皇太子、先祖、師僧父母へと廻向したものであると考えられる。⑤も缺損部分が極めて多いが、「經讀」として、善導『往生禮讚』を引用している。

總じて言えば、この造像銘記は、善導淨土教を信奉する禪師が龍門石窟における淨土造像に直接関わり、自らの阿彌陀淨土信仰を願文に表明したことを示す極めて貴重な資料である。

ただし、造像記には紀年がないため、果たしていつ制作されたかということが問題となる。この窟には像が全く残っておらず、造形的特徴から年代を推定するのは困難である。

この窟の位置を見ると（圖2参照）、奉先寺大佛（向かって左上端）の北側の窟龕集中地帯にある。周囲の窟龕の紀年銘を調査すると、向かって右上すぐの1068窟が689年、左上の小龕1080が689年、さらにその左の1086龕が686年などであり、1074窟もこの前後に奉先寺大佛造營の影響下で完成したと推測される。

次に1074窟の造像記から年代を推測できる材料を探る必要があるが、久野氏の指摘する通り、銘文中の祈願を記す箇所（④）に「天后」とあるのが重要である。「天后」という號が使用されたのは、「皇帝を天皇と稱

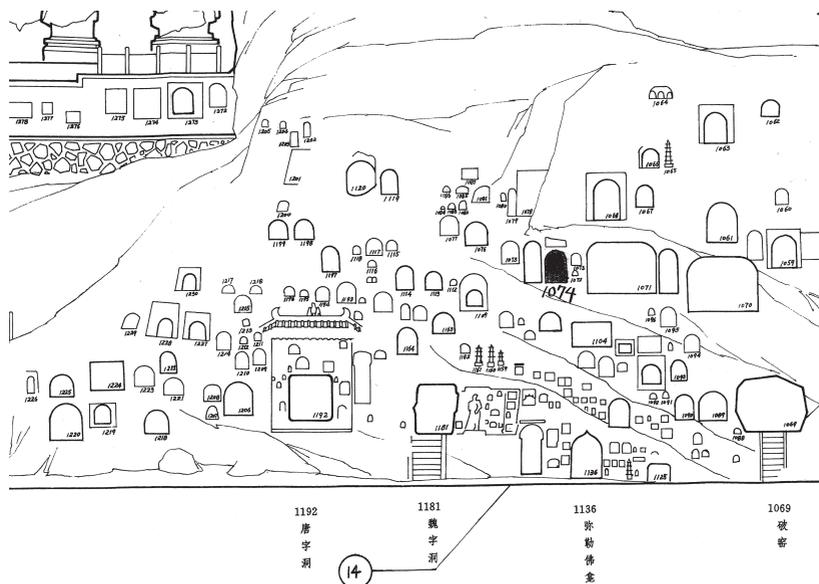


圖2 1074窟 周邊圖

（龍門石窟研究所・中央美術學院美術史系編『龍門石窟窟龕編號圖冊』人民美術出版社、1994 西山立面圖9をもとに一部加工）

し、皇后を天后と稱」させたという上元元年（674）8月から、高宗が崩御して皇太子顯が即位し、武后が「皇太后」となった、弘道元年（683）12月までである。その後、武后は、垂拱4年（688）5月に「聖母神皇」と號し、載初元年9月に國號を周と改め、「聖神皇帝」と號した。

しかしながら、久野氏の指摘通り、造像銘の場合、前の稱號がそのまま用いられる場合がある。そこで、龍門石窟造像銘において、實際、いかように武后を稱しているかについて調査し整理したのが、表6である。表を参照すれば、龍門石窟紀年造像銘で「天后」を使用する最も早い事例は、武后が天后と稱した翌年、上元2年（675）の造像記である。この號はかなり普及したと思われ、高宗の死後、武后が「皇太后」となってからも、垂拱3、垂拱4年の造像記に使用されている。最も遅いものは、國號が周に変わってからもなお「天皇天后」のためと稱する、692年の丁君義造像記である。この造像記は則天文字を使用しているので、武后が皇帝となったことを知っていたはずであり、なぜ「天后」を使用したのか理解に苦しむところである。1074窟造像記は則天文字を用いていないので、この窟の造營年代は674年から683年までの可能性が最も高く、最も遅くとも689年までと考えることができよう。曾布川寛氏は、氏のいう第三期（670-689）には、寶池や九品往生についての明確な造像は見当たらないと述べたが、この窟がまさにそれに相當すると見なすことができよう⁽⁵⁵⁾。

表6 武后のための祈願を記す龍門紀年造像記一覧

西曆	元號	造像主	奉爲 (帝室關係のみ)	主尊名	窟龕號	典據
657	顯慶2	吏部尚書唐臨	奉爲 皇帝皇后殿下	阿彌陀	291	彙録 0318
673	咸亨4	將作監丞牛懿德	奉爲 皇帝 皇后 □□□王諸王國戚	阿彌陀佛、觀 □□菩薩一龕	104 (寶陽北 洞)	彙録 0032
673	咸亨4	西京法海寺僧惠簡	奉爲 皇帝皇后太子周王……。	彌勒像一龕	565 (惠簡洞)	彙録 0779, 龍録 18
675	上元2	宣義郎周遠志等	奉爲天皇天后、太子諸王	阿彌陀 石像一龕	1497	彙録 2537; 2538
679	儀鳳4	「大唐猗氏縣令高君之像」 弟太常主簿光復及姪懿愚等	奉爲天皇天后、殿下諸王	阿彌(陀)像 一鋪	1508	彙録 2560, 龍録 769

680	調露 2	張感仁等	上爲天皇天后	阿彌陀像一鋪	501	彙錄 0511
683	永淳 2	故銀青光祿大夫行尚書左丞揚州大都督府長史魏簡公盧公妻□□夫人李氏	伏願 天皇天后	彌勒尊像一鋪	1049	彙錄 1443
683	永淳 2	衛州共城縣人蘇錡	奉願 天皇天后	釋迦牟尼像一龕	503	彙錄 0514
686	垂拱 2	前右鷹揚□□弘濟府長上折衝蘇文達	奉爲□□高宗天皇大帝太后皇帝皇后	阿彌陀像一鋪	21	彙錄 0008
686	垂拱 2	雍州禮泉縣人王君意	爲天皇天后	阿彌陀像一龕	669	彙錄 1009, 龍錄 264
687	垂拱 3	比丘僧思亮、弟子陳天養、妻魏男恭、兒女迦葉	奉爲皇太后	銘記なし	1518	彙錄 2574
687	垂拱 3	劉孝光	上爲 皇帝天后	阿彌陀像一龕	559	彙錄 0767, 龍錄 24
688	垂拱 4	秦弘等	奉爲皇太后皇帝皇后	銘記なし	1504 (北市絲行像龕) 外壁	彙錄 2546
689	永昌 1	皇甫法仁	上爲聖母皇帝	阿彌陀一軀	1592	彙錄 2626
692	長壽 1	□第母	上爲 聖神皇帝	像一鋪	1387 (藥方洞) 北壁	彙錄 1684
692	如意 1	丁君義	上爲 天皇天后	阿彌陀像一軀	0557 (清明寺)	彙錄 0706, 龍錄 179
694	延載 1	達奚靜	上爲越古金輪聖神皇帝	像一鋪	504	彙錄 0516, 龍錄 892
696	萬歲通天 1	郭玄爽及合家眷屬等繕士焦元操	□□皇帝兼及柒代……願以斯功德、資益神皇	銘記なし	1674	彙錄 2638
698	聖曆 1	故銀青光祿大夫尚書左丞揚州大都督府長史陝州刺史魏簡公盧□□女□□道妻	伏惟 聖皇帝	彌勒像一軀	1059	龍門石窟總錄第6卷文字著錄78頁
701	大足□	□阿直	聖神皇帝	?	2085	彙錄 2791
701	長安 1	張阿雙	奉爲聖神皇帝陛下及太子諸王	藥師像一龕	2065	彙錄 2777
701	大足 1	閻門冬	奉爲聖神皇帝陛下及太子諸王	菩提像□龕	2085	彙錄 2790
703	長安 3	水衡監都尉宋越客妻鹿三娘	爲聖神皇帝	銘記なし	676	彙錄 1118

おわりに

以上の考證によって、この窟の造營年代をおおよそ特定できた。1074窟は善導淨土教の信奉者、おそらく善導の弟子であった慧審が、龍門石窟の淨土造像に直接參與したことを示す極めて貴重な資料であると言えよう。また、唐代の佛教石刻において、今まで善導の著作を引用したものは發見されておらず、この意味においても、1074窟の銘文は非常に重要な資料である。

ここで、李延恩氏の指摘を再び取り上げたい。李氏は善導が「觀淨土」を重視したことと、龍門石窟において繪畫的性格が強い浮彫西方淨土變相が出現することに強い相關性があると指摘する。李氏は第二期に分類するが、上元二年（675）宣義郎周遠志阿彌陀像記を有する第1497龕は、久野氏が解説するごとく、正壁壇には、1074窟や淨土堂と同様の形状の八角形のくぼみがある。また、正壁壇左右側には蓮華化生などの浮彫が存在する。さらに、左壁に『阿彌陀經』を刻むが、『阿彌陀經』は周知のとおり善導が數萬卷書寫したという經である。銘文中にも「結願於西方」などの強い西方淨土信仰が表され、1074窟同様、「天后」のため祈願したことを龍門石窟では最初に表明している。その當時武後の意向が強く反映された盧舍那大佛造營の檢校僧に勅命により任せられ、龍門石窟においていわばスター的存在となった善導の淨土教の影響を強く感じさせる窟龕であり、これはむしろ、李氏の指摘する第三期の淨土系造像の性格を有するものである。

要するに、善導淨土教が龍門石窟の淨土系造像に直接影響を及ぼすようになったのは、盧舍那大佛の完成 675 年前後からであるといえよう。善導淨土教の影響を想定可能な第1497龕は675年完成であり、善導淨土教の影響が確實である第1074龕もこの時期のものである可能性が高い。李氏の言う第三期（約684～）はその開始を約10年遡らせて考えた方がよいだろう。それ以前、650年代の阿彌陀造像の多さ、「淨土」等の用語の多さなどに、善導淨土教の影響をいかに読みとっていくか、今後より精査していくなかで檢證していきたい。諸賢の御批正を請う次第である。

注

- (1) 拙稿「北朝・隋代の無量壽・阿彌陀像銘——特に『觀無量壽經』との関係について」『佛教史學研究』52-2、2010。まえがきの議論が一部前稿と重複するが、議論の前提として必要であるのでご了承いただきたい。
- (2) 塚本善隆「龍門石窟に現れたる北魏佛教」『塚本善隆著作集』第2巻、大東出版社、1974、藤堂恭俊「北魏時代における淨土教の受容とその形成——主として造像銘との関連において」『無量壽經論註の研究』佛教文化研究所、1958、侯旭東『五、六世紀北方民衆佛教信仰——以造像記爲中心的考察』中國社會科學出版社、1998 など。
- (3) 前掲塚本善隆「龍門石窟に現れたる北魏佛教」。
- (4) 佐藤智水「北朝造像銘考」『史學雜誌』86-10、1977。
- (5) 久野美樹「造像背景としての生天、託生西方願望——中國南北朝期を中心として」『佛教藝術』187、1989。
- (6) 松原 410a、埋佛 n35、曲陽 82。
- (7) 松原 430b、埋佛 n33、曲陽 147。
- (8) 石川琢道「北魏の無量壽佛信仰—造像銘を通じて」『曇鸞淨土教形成論——その思想的背景』法藏館、2009。齊藤隆信「中國初期淨土教再探」『日中淨土』19、2008。
- (9) 前掲侯旭東『五、六世紀北方民衆佛教信仰』173～190頁。
- (10) 劉長東『晉唐彌陀淨土信仰研究』巴蜀書社、2000。
- (11) 前掲拙稿「北朝・隋代の無量壽・阿彌陀像銘」参照。
- (12) 前掲塚本善隆「龍門石窟に現れたる北魏佛教」。
- (13) 礪波護『隋唐の佛教と國家』中央公論社、1999。
- (14) 曾布川寛「龍門石窟における唐代造像の研究」『中國美術の圖像と様式』研究篇、中央公論美術出版、2006。
- (15) 久野美樹『唐代龍門石窟の研究』中央公論美術出版、2011。
- (16) 李崧『長安藝術與宗教文明』中華書局、2002。賈發義「武則天與淨土信仰」『首都師範大學學報（社會科學版）』2007年第6期は彌勒・阿彌陀淨土信仰の隆盛に則天武後の政治的意圖が關係していたと論ずるもの。
- (17) 李姪恩「龍門石窟唐代阿彌陀造像研究」『少林文化研究論文集』宗教文化出版社、2001。
- (18) 拙稿博士論文「北朝造像銘研究——華北地域社會における佛教の信仰と實踐」2011.11.17（東京大學）。
- (19) 松原 64・65ab、大村 186 附圖 463・464、珍圖 40。
- (20) 仇寄奴造像記は2點ある。松原 36・37、珍圖 395・396。
- (21) 安居香山・中村璋八編『重修緯書集成』明德出版社、1971、卷3によれば、正しい書名は『樂叶圖徵』だと思われる。

- (22) 張總「天宮造像探析」『藝術史研究』1、1999 参照。
- (23) 京 NAN0031X。
- (24) 拓 3026、魏目 14、松原 99b、魯二一 23、考文 1987.3.25、北碑 9、長藝 366、佐藤科研 3、百品 4。
- (25) 中原 2002.5.67、北拓 280、河南 36
- (26) 拓 5179、魏目 248、考文 1996.2.15、佐藤科研 46、百品 79。
- (27) 彙録 1873、龍録 614、京 NAN0112X、魏目 93、瓊 13、大村 206。
- (28) 前掲佐藤智水「北朝造像銘考」。
- (29) 彙録 1842、龍録 579、京 NAN0040X、拓 3033、萃 27、瓊 12、魏目 17、北拓 270。
- (30) 松原 42・43、碑林全 105.1。
- (31) 彙録 2296、龍録 583、京 NAN0058X、拓 3054、魏目 33、瓊 12、萃 27、北拓 277。
- (32) 佐藤科研 35。
- (33) 珍圖 443、前掲佐藤智水「北朝造像銘考」注 72。
- (34) 浄土思想に言及する諸經論とそこで用いられる浄土を表す用語については、藤田宏達『原始浄土思想の研究』岩波書店、1970、137 頁以下を参照。
- (35) 前掲久野美樹「造像背景としての生天、託生西方願望」。
- (36) 松原 39・40。
- (37) 北魏神龜三年（520）翟蠻造彌勒像記（萬壽寺碑記）。松原 146a、拓 4080、魏目 131、魯二一 103、大村 235、珍圖 42。
- (38) 松原 71b、珍圖 410。
- (39) 南齊永明二年（483）紀德真造像記（南方佛教造像藝術 211、大村 154）に「七世亡靈同生浄土」とある。
- (40) 文物 2004.9.70、曲陽 11。
- (41) 松原 266・267、曲陽 23。
- (42) 陝精 4。
- (43) 大村 185。
- (44) 拓 2129、大村 143。
- (45) 北魏永安二年（529）雷遠造像記。魏目 226（碑側のみ）、魯二一 169（碑陰のみ）、佐藤科研 41。
- (46) 北魏孝昌二年（526）滎陽太守元寧造像記。京 NAN0288X、魏目 188、魯二一 139、萃 29、大村 238。
- (47) 前掲藤田宏達『原始浄土思想の研究』。
- (48) 前掲久野美樹「造像背景としての生天、託生西方願望」。
- (49) 宋德興造像記。松原 27ab、魏目 2、珍圖 6。
- (50) 敦窟 1.246。

- (51) 彙録 1841、龍録 578、NAN0038X、拓 3031、瓊 12。
 (52) この事實は久野美樹氏がその著『唐代龍門石窟の研究』において論じている通りであろう。
 (53) 前掲曾布川寛「龍門石窟における唐代造像の研究」410 頁。
 (54) 前掲李姪恩「龍門石窟唐代阿彌陀造像研究」参照。
 (55) 前掲曾布川寛「龍門石窟における唐代造像の研究」388 頁。

造像銘典據書名略稱一覧（筆畫順）

大村	大村西崖『支那美術史彫塑篇』佛書刊行會圖像部、1915
中原	『中原文物』《中原文物》編輯部。
北碑	張燕『北朝佛道造像碑精選』天津古籍出版社、1996
北拓	李仁清編『中國北朝石刻拓片精品集』上下 大象出版社、2008
考文	『考古与文物』陝西省考古研究所
曲陽	馮賀軍『曲陽白石造像研究』紫禁城出版社、2005
百品	顏娟英主編『北朝佛教石刻拓片百品』中央研究院歷史語言研究所、2008
佐藤科研	佐藤智水（代表）『4 - 6 世紀における華北石刻史料の調査・研究』（科研費報告書）、2005
河南	河南博物院編『河南佛教石刻造像』大象出版社、2009
長藝	李崧『長安藝術與宗教文明』中華書局、2002
京	京都大學人文科學研究所所藏石刻拓本資料 http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/ 管理番號
拓	北京圖書館金石組編『北京圖書館藏中國歷代石刻拓本匯編』中州古籍出版社、1989 ~ 1991
松原	松原三郎『中國佛教彫刻史論』吉川弘文館、1995、圖版 No.
珍圖	金申編著『海外及港台藏歷代佛像珍品紀年圖鑑』山西人民出版社、2007
陝精	陝西省社會科學院・陝西省文物局編『陝西碑石精華』三秦出版社、2006、頁數
埋佛	楊伯達（著）・松原三郎（譯・解題）『埋もれた中國石佛の研究——河北省曲陽出土の白玉像と編年銘文』東京美術、1985
萃	王昶『金石萃編』（『石刻史料新編』1・10）
敦煌	敦煌文物研究所編『中國石窟 敦煌莫高窟』1 ~ 5、平凡社、1980 ~ 1982
碑林全	高峽主編『西安碑林全集』廣東經濟出版社、1999
彙録	劉景龍・李玉昆主編『龍門石窟碑刻題記彙録』中國大百科全書出版社、1998

- 魯 北京魯迅博物館・上海魯迅紀念館編『魯迅輯校石刻手稿』上海書畫出版社 1987
- 龍録 「龍門石刻録録文」NO. (水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』座右寶刊行會、1941)
- 魏目 佛教拓片研讀小組編『中央研究院歷史語言研究所藏北魏紀年佛教石刻拓本目錄』中央研究院歷史語言研究所 2002
- 瓊 陸增祥『八瓊室金石補正』(『石刻史料新編』1・6～8)

〈後記〉

龍門石窟の調査に際しては、龍門石窟研究院の李隨森氏、賀志軍氏、焦建輝氏、李興隆氏に大変お世話になった。ここに厚く感謝申し上げる次第である。

本稿は、平成25年度科學研究費補助金・若手研究(B)(課題番号:25770020)による研究成果の一部である。